

『芽むしり仔撃ち』論

——「僕」像の修正をめざして——

岩田英作

一 はじめに

疫病の村に取り残されていた「僕ら」感化院の少年たちのもとに、村人たちが帰ってくる。村長は、村に疫病は起こらず、村人が「僕ら」少年たちを置き去りにして避難するようなこともなかったと、質の事実を教官に告げるよう、「僕ら」を強迫する。はじめ「僕ら」は、それを頑なに拒む。しかし、「僕ら」は飢えていた。村長から食物と偽証の取引が差し出され、やがて、ひとり、またひとりと、少年たちはその申し出に従い、屈辱の握り飯をほおぼる。しかし、「僕」だけは最後まで屈伏しない。仲間と裏切られ、一人となりながらも、村の大人を非情を、「僕」は決して許しはしない。

英雄的である。一九五八年六月、「文学界」に発表された、大江健三郎最初の長編小説『芽むしり仔撃ち』の主人公「僕」は、たしかに英雄的である。十章から成る『芽むしり仔撃ち』の、うち九章以降を右に略記したが、そこにも、「僕」の英雄的性格は、よく現れているだろう。このことは、これまでもしばしば指摘されてきたところで、

たとえば、江藤淳は「勇者」（「群像」一九五八年七月号）と、松原新一は「勇敢なヒーロー」あるいは「無垢のヒーロー」（『大江健三郎の世界』一九六七年十月、講談社刊）と、片岡啓治は「英雄的抵抗者」（『大江健三郎論—精神の地獄をゆく者—』一九七三年七月、立風書房刊）と、それぞれ「僕」を位置づけている。

私は、「僕」のそういう英雄性を、「僕」のあくまでも一側面として捉えるべきだと考えている。すなわち、「僕」は、英雄として、純粹に形象された人物ではないと考えるのである。

よって、小論では、連帯の位相、「僕」と「弟」の関係性などの考察を通して、「僕」像の修正を試みる。

作者に眼を向けると、従来は、自然、英雄的な大江を思い描きがちであった。しかし、それは、「僕」像を修正する必要がある私から見ると、偶像崇拜の危険を孕んでいるように思われる。

「僕」像の修正に伴い、大江像の修正を行う必要もあると考えている。

二 作品の動機づけ

『芽むしり仔撃ち』の語り手である「僕」は、そこに描かれてある物語を、過去のものとして語る。また、「僕」は、語り手であると同時に、語られる物語世界の住人でもある。この物語世界が、「僕」にとって、過去に経験されたものである以上、語り手である「僕」は、疫病の村に入る以前を語るその時には、すでにその村で起こる出来事を知っているはずである。にもかかわらず、「僕」は、それを、未知なることとして語る。この時、「僕」の語りは、語られる過去の「僕」の視点に立ってなされている。

『芽むしり仔撃ち』における語り手の視点は、ほぼ、その視点に固定されている。けれども、作品の初めの部分に、それとは視点の異なる例を、わずかながら見出せる。

《人殺しの時代だった。永い洪水のように戦争が集団的な狂気を、人間の情念の襲ひだ、躰のあらゆる隅ずみ、森、街路、空に氾濫させていた。》

《町を気の狂った大人たちが狂奔していたあの時代に、(以下省略)》
《あの人殺しの時代、狂気の時代に、僕ら子供たちだけが緊密な連帯を造りあげえる唯一の要素だったのかもしれない。》

これらの箇所での語り手の視点は、語っている時点の「僕」に置かれていて、「僕」は、物語の時・空から退いた場で、それを俯瞰している。この視点は、読者に、語っている「僕」の情動に寄り添う機会を提供してくれる。なぜ「僕」は語るのか、なにを「僕」は語ろうと

するのか、そういう語りの動機づけを知る機会を与えてくれる。

『芽むしり仔撃ち』が、大人と子供の力関係によって成り立っており、しかも両者に善悪の価値づけが行われていることは、あらためていうまでもないだろうが、その対比は、語りの動機づけのうちに、すでに見てとることができる。大人と子供を悪と善に色分けすることの是非については扱置き、いまは次のことを確認しておこう。すなわち、気の狂った大人たちとそうではない子供たちとの対立関係は、この物語を語ろうとする「僕」の、その動機の基底に据えられていたのであり、そして、とくに子供たちについていえば、「緊密な連帯」と呼ばれるものこそ、それらの体現する世界の核に置かれていた、少なくとも「僕」は、そのように考えて語りだしたのであると。

ここで、書き手である大江に眼を向けてみると、大江は、『芽むしり仔撃ち』の三カ月前に刊行された第一創作集『死者の奢り』(一九五八年三月、文芸春秋新社)の後記に、「僕が日本の学生の消極的、否定的側面を強調するという批判には、人間の積極的、肯定的側面をえがくのになさわしい小説型式、長篇を書くことでこたえたいと思います。」と、記している。たしかに、『芽むしり仔撃ち』の前に書かれた大江の作品中、徒勞や倦怠といったネガティブな生の様態を描いたものは少なくない。大江の文壇デビュー作である『死者の奢り』からして、すでにそうであった。そうしたネガをポジに反転させる力を、大江は、子供たちの「緊密な連帯」に得ようとしたといえるだろう。

だが、『芽むしり仔撃ち』の創作動機は、たんに、評者の批判にこたえるためといった、外発的な事情よりもたらされたものではなく、そこには、作者にとって、もっと切実な欲求が働いていたのではある

まいか。大江は、エッセイ「わが小説―『芽むしり仔撃ち』」（『厳肅な綱渡り』一九六五年三月、文芸春秋刊所収）の中で、次のように書いている。

△この小説はぼくにとっていちばん幸福な作品だったと思う。ぼくは自分の少年期の記憶を、辛いの中から甘美のものまで、率直な私たちでこの小説のイメージ群のなかへ解放することができた。それは快楽的でさえあった。いま小説を書きながら快楽をとまなう解放を感じることはない。▽

発表当時の、大江の現状認識は、「ぼくら日本の若い人間たちが、あいまいで執拗な壁にとじこめられてしまっている」、「ぼくらのあいだには真に人間的な連帯はなく、ざらざらした毛皮をおしあっている犬たちのように、ただ体をからませあっているだけだ」（第一創作集『死者の奢り』後記、前掲）というもので、そうした不毛な状況の中に、大江自身、学生として身を置き、連帯の飢餓に瀕していたといえる。その飢餓を潤す甘露を、大江は、過去の少年時代に求めたのであろう。

『芽むしり仔撃ち』に見られる大人と子供の疎隔には、「あいまいで執拗な壁」が投影されているであろうし、子供たちの「緊密な連帯」についても、それは創作上の、たんなる意匠というのではない。

「僕」が、かつて味わった連帯を想起し、夢想し、語りだす、そこからは、書き手である大江の氣息を、たしかに聴き取ることができるように思われる。

三 「反としての連帯

△夜更けに仲間の少年の二人が脱走したので、夜明けになっても僕らは出発しなかった。そして僕らは、夜のあいだに乾かなかった黄色の硬い外套を淡い朝の陽に干したり、低い生垣の向うの舗道、その向う、無花果の数本の向うの代赭色の川を見たりして短い時間をすごした。前日の猛だけしい雨が舗道をひびわれさせ、その鋭く切れたひびのあいだを清冽な水が流れ、川は雨水とそれに融かされた雪、決壊した貯水池からの水で増水し、激しい音をたてて盛りあがり、犬や猫、鼠などの死骸をすばらしい早さで運び去って行った。▽

この、冒頭の第一段落は、「僕ら」にとって、こちら側と向こう側が存すること、すなわち、「僕ら」の生が、ある限定を被ったものであることを、よく物語っている。

第三文に注目すると、それは、動的なイメージを、視覚に強くうたえる。死骸さえも、躍動しているかのようなのである。しかし、その生き生きとした世界は、「僕ら」にとって、「生垣の向う」、「無花果の数本の向う」にあるものなのだ。

「僕ら」を、生き生きとした世界から隔て、その向こうに立ちはだかっているのは、「決してよそからの人間を受けつけずはじきかえず」村であり、「排他的な鎧をすっかり着こんでいる農民である。農民が、「僕ら」を疎外する理由としては、村落共同体特有の排他性、窮乏を究めた第二次大戦末期という時代性などが考えられよう。しかし、そうした一般論とは別に、「僕ら」と村人とのあいだに横たわって

る独自の壁は、なによりも「僕ら」が感化院に属していることよって出来ている。教官が口にした、「あいつらときたら、お前たちを癩病みたいに嫌っている」という言葉が象徴しているように、癩病患者が島に隔離されるのと同様、少年たちも、彼らが感化院に属するがゆえに、社会の周縁に位置づけられているのである。「僕は檻のなかの獣のように生垣のこちら側を歩きまわり、……」と語る「僕」は、そういう彼らの社会的位置づけを、よく承知しているだろう。

冒頭の第二文は、その檻のなかの少年たちを描いたものであるが、しかし、そこから、閉じ込められた者の暗さは、微塵も感じられない。印象は、むしろ逆である。他の、「陽に乾いた踏石の上に腰をかけて濃い褐色の地面の葉かげを見つめ、そのともすると揺れうごくあざぎいろの輪郭を指さきでなぞったりする。」といった箇所から受けるイメージも同様で、少年たちは、まるで動物園の猿のように妙に落ち着き、静かに充足しているかのようなのである。

しかし重要なのは、この、いつけん陽気で穏やかな少年たちの生が、「他人の眼のままで最も安全であるためには、石や花、樹木のように意志のない、眼を持たない存在、ただ眺められる存在であることが良いことなのだ。」という自覚のもとに営まれていた点であろう。つまり、少年たちのスタティックな物腰は、彼らの前に立ちほだかる村という強大な壁が、いかにしても乗り越え不能なものだという諦観より生じたもので、彼らの陽気さも、けっしてポジティブなものではない。事実、少年たちは、移動の間に、いくたびも脱走を試み、試みてはことごとく村人に捕まっている。積極的に働き掛けても、その先は、常に閉ざされているのだ。少年たちは、二週間の移動をとおして、その

ことを知り、と同時に、「意志」を持たず、静かに送る生が安全であることを学習したのである。

ここに見られる、逆説的な明るさともいいたものは、「芽むしり仔撃ち」以前の作品からも窺えるところであって、「僕ら」の生の様態は、その一変形と見做すことができる。

『芽むしり仔撃ち』の特質は、疫病の村を、一時、大人不在の空間とすることによって、その少年たちに自由を与え、少年たちの生を、そうした変形の段階から創造の段階へと向かわせている点にあるだろう。

むろん、自由とはいえず、村人は、村の出口にバリケードを拵え、少年たちがそこから脱出せぬよう見張っているのだから、籠の鳥と同様の支配を少年たちが被っているには違いない。しかし、村の内側にいるかぎり、少年たちは村人から直接手を下されることもなくなっただけで、そのような意味において、彼らはこれまで味わったことのない自由を手にしたのである。

しかし、大人不在の村において、少年たちが、その自由をすぐさま享受したかという点、決してそうはなっていない。むしろ、彼らは、「怠惰な空気、無感動」に侵されており、「僕」は、「充足と緊張を回復するもの、それは村人の復帰ということでさえも良かったのだ」とまで語っているが、どうしてそういうことになるのか。その理由は、「家畜がそうであるように、時間もまた、人間の厳しい監督なしでは動こうとしないのだ。時間は馬や羊のように、大人の号令なしでは一歩も動かない。そして僕らは時間の澱みのなかで膠着状態にある。なにをすることもない。」という「僕」の認識から窺い知ることができ

る。簡潔にいつて、少年たちは、自由に慣れていないのだ。これまで、「石や花、樹木のように意志のない、眼をもたない存在」になることを学習してきた少年たちは、飼ひ慣らされた動物が自然にすぐには適応できないように、自立の飢餓状態にあるものの、主体的に「充足と緊張を回復する」手立てを見出せていないのである。

少年たちの主体が働き始めるのは、彼らが村に入って四日目の、夕暮れに行われた埋葬作業をおしてである。

△そして、僕らは、しだいに濃くなって行く夜の新しい空気と硬い粉のような冷たい霧、寒ざむした風のなかで、いつのまにか躰をよせあい腕をからみあい、黙りこんだ緊密な環になって土を踏みかためた。僕ら途方にくれた者たちの間に固い結束がおこなわれようとしていた。(中略)／彼ら(死者のこと・引用者注)は足もとから飛びたつ鳥のような恐怖を僕らにさそったが、谷の向う側、バリケードのかけに猟銃をかかえて僕らを拒んでいる大人たち、△外部△の卑劣な大人たちよりはまだしも僕らに近かったのだ。△

ここで、少年たちは、死者を踏みしめることによって、それとは逆の生の方向へ、みずからの力で向かおうとしている。大人に依存してないどころか、大人を拒否してさえいる。引用後半の口吻から察するに、すくなくとも「僕」においてはそうである。「僕」は、死者を踏みしめる以上に、村の大人たちを踏みしめ、突き放している。見方を変えれば、それだけ「僕」は、村の外部にたいして意識的だということになる。

しかし一方、「僕」は、祭の場面で、「僕ら」と兵士の間には高い障

壁があつてそれを乗り越えることができない。兵士はおどおどしているくせに村の中へ外部を持ち込んでいて、今となってもそれにこだわっていた。大人になりかけの奴、大人になった奴、それらは始末におえない、と」「余裕にみちて考え」ている人物でもある。と同時に、忘れてならないのは、同一の箇所で、「僕」は、祭の輪へ戻ろうとしない「僕」と季と南を、「もう、あまり子供ではない」と考えてもいる点である。さらに同じ場面から指摘すると、「僕」は、「僕ら」が見捨てられたわけではない、兵士の冷めた発言に、「村の外のことを考えるな」と「怒りにかられて」反駁しているが、そういえばいうほど、村の外部に意識的である「僕」の姿が、逆に浮かび上がってくる。

村の外部を意識する脱走兵との間に「障壁」を感じながら、みずからも外部を意識している「僕」。大人は始末におえないと考える一方、自分を「あまり子供ではない」と考えてもいる「僕」。祭に加わりもするが、それを傍観してもいる「僕」。こうした点から、「僕」は、子供と大人の、ちょうど境界線上に位置する人物として捉えられる。「僕」が、外部を意識するのは、いま述べたとおり、「僕」がすでに大人の年齢にさしかかっているためでもあるが、それに加えて、「僕」が少年たちのなかで担っている役割にも、その原因があるので、はなからうか。

「僕」は、少年たち十五名の班長に任命されている。けれどもそれは、教官から与えられた形式上のことで、「僕」自身も、彼が班長であることについては、「俺だけど、誰でもいいんだ」といつている。しかし、以下に例示する「僕」の振舞いなどを見ると、それは極めて

班長的なのだ。少年たちのなかで、いちはやく疫病の兆を嗅ぎつけた「僕」に向けて、村人の逃亡に疑問を抱いた南は、「なぜなんだ？」と問うが、それについて「『知らない。見当もつかない』と僕は警戒しながら嘘をいっ」ている。また、疫病に気づいた南にたいし、「僕」は、「お前、疫病のことを決めているな」、「お前のおかげであいつら（仲間の少年たちのこと・引用者注）がうるさく泣きわめきはじめたら唯ではおかないぞ」と威嚇している。「僕」が、かように疫病の露頭を阻もうとするのは、仲間の秩序の混乱を避けるためであろう。つまり、「僕」は、自分が十五人の指導者の立場であることを、よくわかっている。しかも、それは、形式的に外から与えられた自己の任務を弁えるという仕方ではなく、みずから内発的にみずからに課するという仕方で培われた自覚だといえよう。

このように、疫病の渦中に取り残された集団の維持を念頭に置く「僕」が、一方で、かれらを置き去りにした外部の大人たちを意識するのは、必然の成り行きといつてよい。

村人が村から姿を消したのち、なお村の大人のこと、そしてかれらのやったことを忘れぬことよって、「僕」は、「僕ら」の結末に、社会的な告発の意味を込めたいと考えられる。

そのことは、さきの埋葬作業にも現れていただろうし、ほかの、たとえば「僕」が少女のためにバリケードを越える場面からも、窺えるところであろう。

バリケードを越える時の模様は、「荒あらしい風と寒気、そして激しい孤独が僕におそいかかり」、「僕はそれらと戦わねばなら」ず、「殆ど力を出しつくして最後の枕木に手をから」めて這い上がるが

「休息していることはできない」、なぜなら「見張り小屋から狙撃されたら最初の一発で僕の頭は砕けちるだろう」からだ、といった具合で、まさに命懸けの、困難極まりない試みを、「僕」は行っている。ここに見られる「僕」の力強さは、当然、少女との結びつきの強さに比例するものであろう。裏を返せば、それは、少女を置き去りにし、バリケードを拵え猟銃で見張っている村人への、強力なプロテストでもあるだろう。

感化院の少年たちのみならず、朝鮮人の李少年、少女と疫病に罹った母親、脱走兵を加えた村の残留者は、いずれも社会的に弱い立場に立たされた者である。それら弱者の連帯を、境界者「僕」のまなざしは見逃すことなく、村の大人の弱者切捨て主義にたいする反として定位しているのである。

四 「弟」の世界 —もうひとつの連帯—

しかし、そういっただけでは尽くせぬものが、彼らの連帯にはある。

雉を捕まえたことに端を発する、第七章の祭は、弾を守り、ひいては村を守るために催されたもので、とくに「僕」は、それが「俺たちの村」のためのものであり、自分が「誰からも棄てられた訳じゃない」ことを強調している。つまり、「僕」は、外部を意識する、大人としてのまなざしを捨てたいのだ。そして、境界者である「僕」は、もう一方のまなざし、すなわち、子供としてのまなざしによって少年たちの世界を捉え、みずからもそこへ入ろうとするのである。その世界とは、「僕」が祭を傍観する以前、「みんな酔いに血を湧きたぎらせて」

踊り歌った、その光景に現れていたはずである。

余僕は長い間歌っていた。そして急激に月が上り、雪は柔らかい光におおわれた。僕はみんな身震いし、それからどなりちらしながら雪の中へ駆け出して行ってでたらめな踊をおどった。▽

ここに提示されているのは、少年たちの言葉ではなく身体である。

彼らの歌う歌は、李少年から教わった葬式の歌で、しかも、それが李の母国語で歌われるとき、彼らにとって大切なのは、歌詞ではなく、歌うという行為そのものであるだろう。つまり、歌や踊を共有しあうことで、少年たちは、身体のレヴェルで交感しているといえ、そういう観点でもって、たとえば先に考察した埋葬作業の場面を眺めれば、「いつのまにか身をよせあい腕をからみあい、黙りこんだ緊密な環になって土を踏みかため」る少年たちについても、いまの祭の箇所と同様の指摘ができる。そして、次に引用する、バリケード越えから帰ってきた「僕」と「僕」を迎える少女とのやりとりの場面では、いま述べた位相に属する結びつきが、ひととき新鮮やかに唱われているように思う。

余少女が立ちどまり僕が立ちどまった。そして僕らはまたお互いを見つめあった。少女の充血してふくれあがった眼に涙がいっぱいたまり、それが月の光をきらきら反射した。いま少女の肉の薄い脣は殆ど音もたてずに動いていた。急にそのくりかえしている言葉の意味が僕につたわった。／あんたが戻ってこないと思っていたのよ、とそれはくりかえしていた。戻ってこないと思っていたのよ、とそれはひくひくする無意味な痙攣もまじえてその言葉を叫びたてているのだ。僕は少女の脣から眼をそらせ痛む指さき

を見おろした。血が敷石にしたたがっていた。ふいに少女の掌がそこへ伸び、屈んだ少女の脣が僕の指をとらえ、小きぎみに動く硬い感じの舌がいくたびもその傷ぐちにふれ、それから傷の上をねばっこい唾液がうるおした。僕のうなだれた額の下で少女のうなじが鳩の背のようにしなやかにまるっこく、そして少しずつ動いていた。▽

これは、無音の世界である。少女が発している声なき声、それを「僕」が読脣によって補ったと考えるよりも、むしろ音声を伴わないそのことを尊重すべきであろう。なぜなら、「あんたが戻ってこない」と思っていたのよ」という少女の言葉が、語られず、現前化せぬことによって、「僕」はそれを「叫び」として聴きとめ、少女の心に触れているのであるから。補えば、少女の言葉に括弧が付されていないことも、それが少女の内なる言葉であることの二証左といえるだろう。そして、その少女の「言葉の意味」が、「急に」「僕」に伝わったというこの伝わり方は、知を媒介に順序立てられたものではない。涙の溜まった充血して膨れた眼、痙攣しながら動く脣、それら少女の総合に、「僕」は、突然意味を感じ、少女の心に応じたのだ。右引用後半の、「両者の結びつき方については、それがひじょうに動物的なものであると、簡潔にいつておけばよいと思う。

こういう位相の連帯は、作品の随所に窺うことができ、枚挙に遑がない。一方で、この作品は、確かに社会的な意味における連帯という要素を持っている。しかし、そういう抽象化、觀念化を拒む、いわば交感としての連帯が色濃く描かれていることも、また確かなのだ。この連帯に、反という概念は含まれない。各々の位置づけとか役割といっ

た自覚も伴わない。「僕」が少女の心に触れ、少女の舌先が「僕」の傷口に触れるとき、二人は弱者として繋がっているのではない。両者に、社会的な名付けは不要である。

さて、ここで思い起こされるのは、作中、ひととき異彩を放っている、「僕」の「弟」のことである。

もともと、「弟」が感化院に入れられた理由は、父親が「弟を疎開するための土地を探しあぐねて、そのあげく感化院の集団疎開に弟を便乗させることを考えついた」ためであり、他の、悪事を犯した少年たち、非行的傾向を持った少年たちとは、入院の事情が基本的に異なる。「弟」の意識では、彼は、感化院へ来たのではなく、ただ兄のいるところへやって来たのにすぎない。他の少年たちが、「ただ眺められる存在」となっている時、「弟」だけは、「逆に村の人間を見まもり観察」できるのは、「弟」だけが、見られる自己を自覚すること、すなわち位置づけられる自己を自覚することを免れているからである。そもそも既に傷を持たぬ「弟」には、社会的に位置づけられる必然性が始めから欠落している。それゆえ、「弟」は、「村の女たちの黄褐色の舌さきからの丸められた唾を頬にうけたり、子供たちから石を投げつけられ」たりするのにたいし、「微笑をあふれさせながら」応えることができもする。つまり、「弟」と村人の間に壁は不在である。このことは、村人以外の人物との場合でも指摘できる。たとえば、「僕らの期待をかけた最後の脱走を腹痛というようにつまらない事情でぶっこわした少年」に、他の少年たちが「腹を立て悪意をいだい」ているのにたいし、「ただ僕の弟だけが、僕らの鬱屈した忿懣とは関係なしにその少年をいたわり、寒がるその少年に上着を貸してやっ

たりする。脱走兵にたいする応対も同様で、「弟」は、「僕」や南とは異なり、最初から脱走兵に親しむことができていた。

したがって、「弟」の特質は、誰でもつながらうような透明性にあるといえ、それは、「弟」が、いまだ社会内存在として名付けられていないがゆえに可能なのである。

こう考えてくると、「弟」は、交感という名の、連帯の要素によって、純粹に形象された人物であると理解できる。

そして、この「弟」の象徴する世界にこそ、『芽むしり仔撃ち』の美しさが宿っていることを付け加えておきたい。

五 「弟」の喪失と再生

「僕」の夢見る二相の連帯、そのうちの一方が、おもに「弟」に託されていた点を、以上のように確認するならば、「弟」の愛犬であるレオの撲殺とそれによる「弟」の失踪という出来事は、まことに重大な出来事であったと思われる。

少年たちのあいだに、少女に疫病を感染させたのはレオであるとの疑惑がもちあがり、レオは南の手によって撲殺される。つまり、少年たちは、自己の保身のためにレオを殺害したのであるが、ここで考えたいのは、その少年たちの姿は、疫病にかかった少女の母親を置き去りにし、さらには足手まといの感化院の少年を見捨てた村の大人たちの姿と重なるのではないか、ということである。

犬と人とは違う、といえるかもしれない。しかし、問題は、その犬が「弟」にとつていかなる存在であったかということなのだ。「弟」

は、レオと共に眠り、レオに口うつしで食物を与える。「弟」にとつて、犬と人との生物学上の相違は、取るに足りない問題である。交感のレヴェルで誰とでも繋がりを「弟」は、レオのぬくもりや微かな寝息を受け止めることで、レオと連帯しているのだ。したがって、「弟」の側に視点を置けば、いま述べた少年と村人との相同性ということとは諒解できる。

ところで、本作品のタイトルが、「いいか、お前のような奴は、子供の時分に締めこらしたほうがいいんだ。出来そこないは小さいときにひねりつぶす。俺たちは百姓だ、悪い芽は始めにむしりとってしまふ」という村長の言葉に由来するものであるとは、平野謙の指摘するところである（新潮文庫解説、一九六五年四月）。これは、村の大人と少年たちとの対比に着眼した場合に得られる解釈であろう。けれども、少年たちと、レオ・「弟」との対比を見たいま、『芽むしり仔撃ち』の「仔撃ち」は、レオの撲殺をも意味していると解せるのである。この作品が、少年たちによる大人の告発という図式のみで捉えきれないことは、もはや明らかだろう。大人を告発してははずの少年たちも、その中に何物をも拒まぬ「弟」を持つことによって、かれら自身も弱者切捨てが告発されることとなるのだ。

もちろん、「弟」の哀願を聴き入れることのできなかつた「僕」も、告発を受ける側にまわったことになり、そのように、村の大人と同様のマイナス面を持つ「僕」を、英雄の二文字で飾ることはできない。ただし、「僕」を、村の大人とまったく同質の者として規定してよいかどうかについては、なお検討を要する。そこで、レオが殺され、「弟」が走り去ったとき、「僕」がどのように考え行動したかを、次

に引用する。

「弟は帰って来なかつた。僕は自分が弟を裏切つたと考えた。（中略）／僕は弟を追いかけて行き、肩をだきしめてなぐさめてやるべきなのかもしれない。それが最も良いやり方かもしれない。しかし僕は年少の仲間たちをとらえている恐慌、彼らを死にものぐるいの叫喚へ追いこみそうな恐慌をふせぎとめなければならなかつた。そして彼らが叩き殺された犬を前にして驚きにうたれているいまが最良のそしておそらくは残された唯一の機会だと僕は考えた。／「お前たち」と僕は叫んだ。「疫病だなどといってめめそしているやつは、犬のように頭を叩きわってやる。いいか、僕がうけあつてもいい、疫病はどこにもはやっていはしないんだ」

自分の「裏切つた」「弟」との関係を回復するか、それとも集団の秩序の維持を心掛けるか、その選択に、「僕」は直面している。言い換えれば、「僕」はここで、まえに述べた二つの連帯のうち、いずれか一方を選びとることを課されている。結果的に、「僕」は社会的な連帯のほうを、リーダーとしての自覚から選んではいる。しかし、「弟」を追っていくことが「最も良いやり方かもしれない」と語る「僕」は、充分「弟」に未練を残している。また、興味深いことには、「僕」のほうから「弟」を裏切つたにもかかわらず、その後、「弟」の行方を探すうち、「僕は弟から見棄てられたのだと考え」るようになっていく。つまり、「僕」は、「弟」を裏切ることによって、逆に「弟」の世界からの追放を、苦く味わわねばならなかつた。「僕」の選択は、痛みを伴つたものだ。だから、弱者切捨てといつても、

六 おわりに

「僕」の場合、それを全面的に肯定しているわけでは無論ない。それどころか、「弟」を追いかけ、ふたたび手を差し延べようとさえしているのだから、その点は、村の大人と大きく異なるのである。村の大人は、子供を顧みない。しかし、「僕」は、「弟」を振り返り、子供の領分に到る門戸を叩くのである。

冒頭でも触れておいたように、村長が少年たちに強要したのは、村に少年が取り残された六日間を、すべてなかった事にしようというものであった。「僕」は、その村長に向けて、「俺たちはお前の村の人間に見棄てられたんだ。」「俺はそれを黙ってはいないぞ。俺たちがやられたこと、俺たちが見てきたことを全部しゃべってやる。」「黙ってなんかいるものか」と抵抗する。そして、仲間の少年たちが村人に屈伏してしまい、「僕」は、仲間からも「見すてられたことがわかりすぎるほどわかっていた」にもかかわらず、村長の差し出す握り飯を拒み、抵抗の姿勢を貫く。このとき、「僕」が抵抗したのは、「僕ら」を見棄てた村人にたいしてだけであろうか。いや、そうではあるまい。もし、そうであるなら、「僕」は、村の大人にたいして叫ぶ一方で、自己の内なる大人には眼をつぶる、たんなる見掛け倒しの人物である。村長の申し出に、最後の最後まで首を縦に振らない態度、それは、「僕」にとって、レオの撲殺を黙認し、「弟」を見棄ててしまった、「僕」自身の中の村人への、粘り強い抵抗でもなくしてはならなかったはずである。

そして、それは、「弟」に捧げられる、償いの意味を込めた鎮魂歌であったろうし、同時に、「弟」的なるものを「僕」の内に蘇らせようとする、再生の歌でもあっただろう。

周知のとおり、『芽むしり仔撃ち』は、大江文学のなかで最初の転換点にあたる作品と目されてきた。大江は、『芽むしり仔撃ち』を境に、追憶の世界に住まうことをやめ、現実の世界へと向かった、という具合に。そういう指摘は、この作品で「僕」が夢見た少年たちの世界を、奥野健男のように「一種の幼児退行現象」（『大江健三郎全作品3』付録、一九六六年一〇月、新潮社刊）であると否定的に見る立場からだけでなく、それを肯定的に読む立場からもなされてきた。たとえば、松原新一は、少年たちの繰り広げる世界に「芸術達成」を見ながらも、「現代の状況と現代に生きる人間とを、批評的にみる勇気」を作家がもっているかぎり、彼はそのような憧憬に深く訣別を告げるであろう。」としている（『大江健三郎の世界』前掲）。

たしかに、「僕」が夢から弾き出されたように、大江も子供時代の追憶に浸り続けることはできなかっただろう。また、大江が、『芽むしり仔撃ち』以後、現実へと向かったと考えることにも異論はない。それらのことは、以後の作品を読めば明白である。しかし、『芽むしり仔撃ち』に造形された少年たちの世界に居ることと現実に向かうこととは、大江にとって、まったく断絶されたものとしてあるのではない。

もしも、大江の、苦渋に満ちた現実との闘いが、『芽むしり仔撃ち』の世界と無縁のところで行われるならば、大江は、「僕」が「弟」から告発されたことの意味を解していなかったということになる。すなわち、大江自身、程度の差こそあれ、彼の対する相手と同じ穴の貉

となつてしまいかねない。

そうではなく、すでに英雄に自己を重ねられぬ大江は、『芽むしり仔撃ち』の世界の、とくにその核であった「弟」のもつ優しさを記憶しつつ、まず内なる大人と闘わねばならなかった。そうした内的な格闘が行われてはじめて、大江は現実には踏み出したのである。

だれしも子供のままでいることはできない。「弟」のように無垢のままであり続けることは難しい。妥協や自己欺瞞のない世界、すべての《壁》が取り払われ、互いに心底から繋がりうるような世界、そんな世界は、おそらく何処にもないだろう。日本にも、ここよりほかのどんな場所にも。

しかし、ないと諦めて、順応主義に寄り掛かり、自己を欺くのも仕方のないことだとして生きていくほど、虚しいこともないだろう。

絶望的ではあっても、夢を忘れまいとし、その夢を打ち砕く力にたいては抵抗しようとする態度。大江の選んだ態度とはそのようなものであったと考えられる。そして、『芽むしり仔撃ち』に続く『見るまゑに跳べ』（一九五八年六月）から『個人的な体験』（一九六四年八月）前までの作品群には、そういう態度が、極度なまでに潔癖に描かれてあると思う。『われらの時代』（一九五九年七月）の主人公が最後に逢着した、「おれにとって唯一の《行動》が自殺だ！」との認識は、その潔癖さゆえの、現状拒否であろう。『芽むしり仔撃ち』以降について、大まかには、そういう考えを持っているが、細かな考察は、今後に待ちたい。

他にも、今後の課題とすべき点があるので、その点を、最後に述べておきたい。

周知のとおり、『見るまゑに跳べ』以降、『性』と『政治』が、大江文学の主要モチーフとなる。今回考察した二相の連帯、すなわち、交感としての連帯と社会的な連帯の二つが、『性』と『政治』と、それぞれ関連しあうものなのか、しあうとすれば関連の性質はいかなるものか、検討の必要がある。

もうひとつは、村についてである。『芽むしり仔撃ち』において、これほどまでに悪質な村を描いた大江は、『万延元年のフットボール』（一九六七年一〜七月）以降、村を生の根拠地たる主要な場として繰り返し描くようになる。このズレを検討する上で看過できないのが、『芽むしり仔撃ち』の続編と見做される「『芽むしり仔撃ち』裁判」（一九八〇年二〜四月）である。そのなかで、『芽むしり仔撃ち』の書き手である「僕」は、その村の書き方をめぐって、疑義を突きつけられる。換言すると、『芽むしり仔撃ち』からはけっして窺うことのできない、悪としてではない村人側の、少年たちを置き去りにするに到った事情が書かれているのである。この続編を考察することによって、『芽むしり仔撃ち』のみでは見えなかった『芽むしり仔撃ち』の世界が明らかになるであろうし、その後の大江の『村』観を闡明する手掛りを得ることもできるであろう。